

ツアラトウストラの仮面について

IMASAKI, Takahide / 今崎, 高秀

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

13

(終了ページ / End Page)

24

(発行年 / Year)

2016-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012982>

ツアラトウストラの仮面について

今 崎 高 秀

本稿は『ツアラトウストラかく語りき』の「仮面」の諸相を鍵として、この作品全体を解釈することを試みる。¹⁾

「全て深いものは仮面を愛する」(『善悪の彼岸』40節)という有名な言葉が示すようにニーチェ哲学において仮面は重要な意義を有しているのだが、「ツアラトウストラ」という具体的な人物形象を用いて様々な哲学的メッセージを発するこの特殊な書においてこそ、その重要性はより一層明瞭となる。極めて「人間的な」テーマである仮面という問題を主題化することで、これまで「永遠回帰」や「超人」といった大言壮語なトピックに隠れがちであった、この作品が持つ微細にして繊細なモラリスト的な視座や含意を浮き出させることが出来ると考える。それは、これまでニーチェ研究において十分には掘り下げられてはこなかった「他者」や「社会性(社交性)」といった契機を再発見

することにも繋がる。仮面を纏うということは、他者の存在、あるいは人間存在の社会的側面を前提とせざるを得ないからだ。

一 「序説」から..

真の「没落」は仮面と共に始まる

「太陽」の運動に模して開始されるツアラトウストラの「没落」という営為は、自らの知を伝達する運動を表わしており、他者の存在を必須とする。この作品全体を貫くツアラトウストラの没落という営為は、この「手」を、彼の過剰な知を受け取ることの出来る「他者」を探し求める歩みなのである。とは言え、この「没落」が真の意味において開始されるのは、「序説」第二節の「日の出」によって

ではなく、あくまでも第九節の「第二の日の出」と共にである。序説は大きく、(1)「第一の日の出」と共に始まるツアラトウストラの没落(下山)、(2)民衆への説教、並びにその挫折、そして(3)「第二の日の出」と共に始まるツアラトウストラの再度の没落という三つの場面から構成されるが、ツアラトウストラはこの過程でその内面を変化させている。(1)、(2)の時点ではツアラトウストラはまた「仮面」は被つておらず、言わばキリスト教的である。民衆に対する「教説」の挫折の後、「第二の日の出」と共に、彼は自らの二つの素朴さを乗り越えている。一つは、己の思想が「憎しみ」という感情的な溝抜きに、彼が語る通りに民衆から等しく理解されるであろうという、人間と人間の間の相互理解に対する素朴な前提である。ツアラトウストラはここで民衆に対して無防備に「素顔」で語っている。もう一つは、民衆の煽りを自分に対するものと誤解し、その愚直さのために死ななければならなかった「綱渡り師」に対する共感である。彼はこの最初の「友」に対して近くに立ちすぎてしまっており、彼の「死」に自己の「没落」を投影している。

ツアラトウストラは、他者から距離を取るという行為によつて、自らの中に潜む、他者に対する素朴な期待という外側、さらには隣人に対する素朴な共感という内側双方の

素朴さを乗り越える。この「他者から距離を取る」という行為は、彼が再び山頂の孤独へと帰るといふことは全く意味しない。むしろ逆に、この別離は彼が真に(生きた)「友人」と呼びうる人間と出会うために歩み出すということである。このときから、ツアラトウストラは、自ら固有の価値を産み出す準備のあるものに対してのみ語る。彼の言葉は、もはや均質的ではなく、選択的となる。その耳が十分に深くかつ繊細か、そしてその目が高みを見ているかどうかを試しながら、彼は選択的に語る。下界の、乃至は時代精神としての均質性に対して、人間間の精神的な階層という自らの理想を貫徹させんが為にある。

他者との境界線を取り戻し、新たな他者(友人)に出会うためにツアラトウストラが自らを乗り越えるのは、来るべき「日の出」であり、それが「他者を誘惑する」という「昼の仕事」である。故にこの序説においてツアラトウストラが「自己超克」を果たしたと言える箇所は、「第二の日の出」と共に彼の最初の「道連れ」から自らを別つ、その瞬間である。

この自己超克の場面において、「鷲と蛇」が登場する。この人間世界において、超人へ向けて自らを超克しつつ生きることを欲するのであれば、精神的な高みの象徴である鷲の「誇り」だけではなく、薄暗く汚れた深淵を宿す人間

についての、かつそれを知らなからも生を可能とさせる深い知恵を象徴する蛇の「伶俐さ」をも持ち合わせていなければならぬ。綱渡り師は危険に身を晒して生きる程に十分に気高かったと言える。ツアラトウストラもそこに敬意を払っており、だからこそ彼は死にいく綱渡り師を「友」と呼んでいる。だが彼は伶俐ではなく愚直である。彼の死は、愚直な誇りは人を滅ぼすということを示している。この気高い伶俐さの必要性から、ツアラトウストラは仮面を纏う。仮面を纏うということは、山頂のように隔離された孤独へと引き返すことではなく、別離を通じた、まだ見ぬ他者への意志を意味する。

1. 他者への素朴な期待や共感から注意深く距離を取ること（＝精神の「裸性」に対する警戒）、2. 他者を選別的に「誘惑」し、「連れ去る」ということ、3. そのため誇りを携えた伶俐さの必要性、これら三点から、ツアラトウストラは仮面を纏って真の没落を開始する。

二 距離、偽装、誘惑のための仮面

二〇 仮面の諸層

第二部終盤にある「救済について」は、仮面を軸にこの作品の全体像を捉える上で起点となりうる。その理由の一

つは、ツアラトウストラが三者の聞き手（「こぶ男」「弟子」「自分自身」）に対して語り分けているからであり、二つ目は、信頼する弟子にすら見せない彼の最も深い顔が暗示されているからである。

ツアラトウストラは相手に応じて仮面を使い分ける。ツアラトウストラは「こぶ男」に対してその思想の一部分しか見せない。しかしそれは彼が弟子に対して仮面を被っていないということではない（その思想の全てを語るという訳ではない）。「こぶ男」に対する仮面の背後に、彼は信頼する弟子に対してまだ二つ目の仮面を持っており、彼はその下に自分自身に対してのみ語りかける精神の領域をなお隠しているのである。

「何故ツアラトウストラは我々に向かつては、自分の弟子たちに向かつて話すのとは別の話し方をするのか？」ツアラトウストラは答えた。「それに何の不思議があるう！ 背中にこぶをもつもの達とは、当然背中にこぶを持つ者ふうにしてよいのだ！」「よからう」と背中にこぶを持つ者は言った、「かくて弟子たちとは当然心を打ち明けた話をしてよいわけだ。だのに何故ツアラトウストラは、自分の弟子たちに向かつては、——自分自身に向かつて話すのとは別の話し方

「を、する、の、か？」（第二部「救済について」）

ツアラトウストラの仮面には、このように層がある。弟子に対して救済について自らの理想を語るツアラトウストラは凶らずも饒舌になるが、それを自ら戒める。「人間たちと一緒に暮らすのはむづかしい。何故なら、沈黙することがたいそうむづかしいからである。多弁な者にとつては、特にそうだ」（同）。一見単なる挿話的なこの自戒のシーンには、彼が永遠回帰を口にするのはまだ時期尚早であり、自らの孤独、乃至は思索をより深める必要があることを示している。

重要なことは、ツアラトウストラの仮面の諸層は、彼の思想・教説の本質的部分を成す人類にとつての精神的位階の存在と不可分であるということである。ツアラトウストラの仮面が諸相を備えているのは確かである。しかしツアラトウストラは仮面の複数を決して水平的に雑多なままには放置しない。それら複数の仮面を垂直的に束ねる役割をしているのが、「山」や「谷」、あるいは「海」といった地形的なメタファーを持ってして描かれる、即ちこの作品の世界観そのものとなつて、人間の精神的位階、「高さと低さ」ないしは「偉大さと卑小さ」なのである（言うまでも無く、啓蒙の嫡子である「おしまいの人間」が繁栄す

る、言わば「平らな世界」はこれとは対極にある）。

本稿ではツアラトウストラの仮面の諸相・諸層を、その歩みにほぼ沿った形で大きく以下のように概観したい。(1)人間の「卑小さ」から距離を取ること、(2)友情における仮面、(3)「復讐」、(4)永遠回帰の層、そして(5)「継承者」への意志。

二・一 人間の「卑小さ」から距離を取ること：

孤独への仮面

精神的な距離を保つためにツアラトウストラが「下」の方で、とりわけ民衆に対して被る仮面は、その繊細な精神を表現している。ツアラトウストラのこの繊細な知恵は、如何なる人間のうちにも存在する人間の弱さに対する心理的洞察から生まれている。「市場の蠅ども」においては、卑小ではあるがその数のために強力な「大衆」とその支配者である「俳優」から織り成す「喧騒」から孤独を守ることが擁護されるが、ここでは同時に、「ツアラトウストラが如何なる人間を友と呼んでいるのか」、「如何なる人間を誘惑しようとしているのか」が示されている。それは強靱な精神を持つ者では全く無く、むしろ繊細な精神と他者への深い感受性を有している人間である。ツアラトウストラのそもそもの狙いは、そのような繊細にして深く苦悩しえ

る人間を、卑小な者たちの「復讐」から守ること、引いては彼ら固有の孤独へと誘い、それを超えて、その温和さと気高い誇りの背後にまだ秘め隠された仕方では彼らの中に眠っている偉大さを呼び起こすことにある。

ツァラトゥストラは素朴な徳の教師では全く無く、深い人間通である。彼は、真の意味での「誇り」として表現される人間の偉大さが、小さい人間の誇りを刺激するということをよく理解しており、人間の偉大さと卑小さの間にある、誇りを巡るこの深い溝は、「愛」によっても言語的な意思疎通によっても架橋しがたいほど深いものと見る。たとえ偉大な人間が、その偉大さの故に卑小なものをその卑小さから救い出そうとしても、皮肉にもその行為は彼の偉大さのために卑小な人間の卑小さを復讐として燃え上がらせてしまう。復讐とは、弱い人間が強い人間の力を、自身の卑小さを否定することなく自らの水準まで精神的に引き下げようとする激情である。故に、ツァラトゥストラが説く卑小な人間、乃至は人間の卑小さに対する唯一にして最良の作法は、「距離を取る」ことである。

二・二 友情における仮面…距離、闘争、恥

「私は、我が身のうちにもろもろの輪 (Kreise) を結んで、神聖な境界をなす。いよいよ高き山々にさしかかるに

つれて、わたしと共に登る者たちは、いよいよ少なくなる」(第三部「新旧の諸板について」19)。ツァラトゥストラとその弟子たちによつて構成される「輪・同胞 (Kreise)」は、神の名において信者の同質性・均質性が約束されなければならぬような宗教的共同体とは無論全く異なる。その端的な理由は、ツァラトゥストラが形成する仲間の輪は、最終的にその師が乗り越えられ解体されることを目指していることにある(第一部「贈与する徳について」3)。ツァラトゥストラがここで語る徳は、他者への敬意の証として要求される、闘争的な差異である。然るべき「敵」として相手を尊重する闘争的な関係は、「戦争」という強いメタファーを持つてして語られる「友情」において最も理想的にしてかつ具体的な形をとる。

なおツァラトゥストラが「友情」という闘争関係を高く評価するのは、一つには友情が最も理想的な超人への「橋」、即ち媒介となりうるからだが(ツァラトゥストラは「一足飛びに「超人への憧れ」を説いている訳では全くない)、もう一つは「友人」が、自分自身との対話が深淵へと沈み込むことから救う「第三者」としての役割をも果たすからである。「隠遁者にとつて、友人はいつも第三者である。第三者は、「私」と「私」の二人の対話が深みに沈みこむことを阻止する、コルク製の浮きなのだ。全ての隠

通者たちにとつて、あまりにも多くの深みがある。それゆ

え彼らは友人と、友人の高みにたいそう憧れる」(第一部「友人について」)。既に見たようにツアラトウストラは孤独を擁護する者であるが、しかし同時に孤独における自己自身との対話が、外部への通路を失い内的世界の閉じた深みへと沈み込む危険性があることも重々理解している。

この友情において、強敵としての距離を維持するために、相互に可能な限り自分を美しく着飾る「衣服」が要求される。つまり、ツアラトウストラの友情論において「闘争」と「衣服」はセットである。

君は、自分の友人の前では、何の衣服も身に付けないでいたいと思うのか？ あるがままの君を彼に示すことが、君の友人の名誉になるといふわけか？ だが、そんなことをすれば、彼は君を悪魔にくれてやりたいと思うことだろう！ 自分を隠し立てしない者は、人を憤慨させる。とすれば、君たちが裸を恐れるのも、大いに理由のあることだ！ そうだ、もし君たちが神であつたら、君たちは自分の衣服を恥じてもよいだろう！ 君は自分の友人のために、どれほど美しく着飾つても、着飾り足りない。というのは、君は彼にとつて、超人へ向かう一歩の矢、一個の憧憬であるべきだ

からだ(第一部「友人について」)。

我々の未だ人間的で、卑小で弱い部分に気兼ねすることなく、敵としての関係を維持するために、裸体の露出はむしろ戒められ、外面、乃至は仮面の美化への努力が称揚される。この友情における衣服の必要性の背後には、「恥」に対する洞察がある。それは(猿などの動物から我々を分かつような)性的なものではなく、むしろキリスト教に代表される「同情」、即ち他者の精神が自らの内面の主権性に踏み込み均質化されることを、あるいは逆に自らの同情が他者の内面を侵害することも同様に鋭く拒否する精神の在り方である。ツアラトウストラが気高い、乃至は誇り高い人間と呼ぶのは、むしろ他者に対して繊細な感受性をもつが故に、深い敬意と共にその他者の内面的な主権性を可能な限り尊重するような人間である。何故ならば、そこにこそ彼を彼たらしめる「誇り」が、たとえ潜在的にでも、存在するからだ。ツアラトウストラはその誇りの芽を摘むことを非常に敏感に拒否する。

二・三 「復讐」…意志と時間

第二部は「鏡」を持った子供とともに開始するが、鏡に映つたこの「敵」は、ツアラトウストラ自身の内部に潜む

もの、つまり容易には克服しがたいものを示している。ここでは「復讐」、さらにその中でも意志の時間に対する復讐にのみ着目する。その理由は、それが仮面の内側にある極めて内的なテーマであり、なおかつこの作品において、ツァラトゥストラがその弟子にすら秘め隠す「永遠回帰」という問題への入り口になっているからだ。ここでツァラトゥストラは弟子に対して語るうちに、知らず知らずのうちに「自分自身」に向かって語りだす。

意志は新たな価値を創造する力をもつが、しかし意志は時間の前では「引き返すことが出来ない」という自らの無力さを認識せざるを得ない。「時間が逆行しえないこと、これが意志の怨恨である。〔…〕時間とその『そうあった』とに対する意志の敵意、これが、いやこのみが、復讐そのものなのだ」（第二部「救済について」）。意志は時間の経過を支配できないという、時間に対するその無力さに起因する怨恨から、自らの創造性を否定しようと試みる。あたかも生存そのものが一つの「罰」であるかのような妄想を産み出すことによって、自らの創造性を妄想の「牢獄」の中に閉じ込めようとするのである。その牢獄の中において、「もはや意志しない（ことを欲する）」までに意志は自らを逆説的な仕方に変容させてしまう。それは、時間に対する無力という苦悩から、「罰」という狂気の妄想によつ

て自らを解放しようとする、意志の痛ましい試みである。「時間が自分の子供たちを食らわざるを得ないという、あの時間の法則、これがそのまま正義である。」このように狂気は説教したのだ」（同）。「時間」の前で、獅子は自らの強さを否定することで、未来を、時間の有意味さそれ自体を否定する狂気へと至る。己の尻尾を咬むウロボロスの蛇の如く、人間の創造的意志である「獅子」はここでその未来の「子供」を食らうという狂気に至る。「誰が意志に時間との和解を、また一切の和解より高いものを教えたであろうか？」（同）という自問とともにツァラトゥストラは語りを中断するのだが、この難題を克服する知恵にはまだ自らが「熟していない」ことに気付く。故に、この難問を克服するために、ツァラトゥストラは再び孤独を深めることになる。創造的意志がその創造性のために挫折してしまわざるをえない「時間」に対してそれでもなお「然り」という為にある。

二・四 永遠回帰の層

第三部の中心問題となっている「永遠回帰」は、「幻影と謎」と「快癒しつつある者」において語り出される。だが両者の回帰の内実は同一ではない。前者における永遠回帰は、この瞬間が無限に回帰することを欲するか否かを

我々に突きつける、即ち己の生を肯定する試金石としての永遠回帰であり、これは極めて実存的なテーマと言える。そこで問題になっているのは、私の生の「時間」の肯定だからだ。この回帰との対決は、とりわけ第三部「幻影と謎について」における「小びと」との対決で描かれる。

「時間自体が一つの円環である」(第二部「幻影と謎」2)、故に一切は虚しいと嘲笑気味に呟く小びとに対して、ツアラトウストラは小びとが知る由もない、人間のみに意味を持つ今この現在という時間を突破口として、即ち深遠の苦悩を克服する「勇氣」が発動する「瞬間」を突破口として、永遠回帰の思想を語る。それは、生が無限回帰することを私が欲することで、「一切の『そうあった』」(第二部「救済について」)を「しかし、そうあることを私は欲したのだ！」(同)へと変転させようとする、かつて彼が口を閉ざした「時間との和解」に対する一つの解答の試みである。

この直後に現れる別の幻影において、蛇の頭を噛み切る「牧人」はこの作中最も超人に近い形象であり、彼の「笑い」は永遠回帰を肯定しきった境地を象徴しているのは確かである。だが「そのような笑いへの憧れが私をむしばむ」(第三部「幻影と謎」2)という言葉が示すように、この牧人はツアラトウストラと完全に一致しうる形象では

ない。「快癒しつつある者」において牧人はツアラトウストラの投影として言及されてはいるが、しかしここでツアラトウストラを苦しめる回帰は「幻影と謎」における回帰とは内実が異なる。ここでツアラトウストラを苦しめている回帰は、彼の生それ自体の肯定の問題ではなく、幾ら超人へと努力しても報われない、「人間の卑小さ」の永遠回帰へと黒い蛇の「重たさ」の内実が絞り込まれている。「人間に対する大いなる嫌気、——それが私を窒息させ、わたしの喉に這いこんだのだ(…)おまえが飽き飽きしている人間、卑小な人間が永遠に回帰する」(第三部「快癒しつつあるもの」2)。前者の回帰が私の人生の最高度の肯定、あるいは私と世界との直接的な和解を志向しているのに対して、ここでの回帰は私の生の肯定がたとえ果たされたとしても積み残される人類の課題である。一切の事物が永遠に回帰する(ことを欲する)のならば、彼が受け入れることの出来ない卑小な人間も永遠に回帰することを意味し、それは引いては彼の事業、人類が超人へ向けて自己を乗り越えていくという未来の理想に対して、やはり「一切は虚しい」という重しがそれだけ深刻に跳ね返ってくるのである。「卑小な人間の回帰」という苦惱(「吐き気」)は、彼を実存的なレベルでの、自らの個人的な人生の「瞬間」的な肯定には留めておかない。むしろ、同じものが永遠に回

帰することを欲する、そのような最高の強度において自らの生を肯定するという境地（「幻影と謎」）は、言わばそれに反比例するような形で、彼が決して容認できない卑小な人間の回帰という問題（「快癒しつつある者」）をより深刻に顕在化させる。永遠に回帰する「世界」を「私」が直接のかつ全的に肯定することを、「卑小な人間」の回帰という、私と世界との間に存在する「他者」が、言わば夾雑物の如く邪魔をするのである。

前者の永遠回帰に対してはツァラトゥストラは「勇氣」によって「よし、もう一度！」と乗り越えようとするが、後者の永遠回帰を単なる勇氣や己の意志の強度のみによって乗り越えることは出来ない。それどころか、彼はあたかもこの世界に「外界（他者）」など存在しないかのように、「仮象（夢）」によって自己の内面に閉じ籠ろうとする誘惑にすら駆られる。「私にとつて——どうして私の外などがあるのか？ 何らの外もないのだ！」（第三部「快癒しつつあるもの」）この言葉は、生の肯定を示すものではなく、むしろ一つの危機的状態を示している。「快癒しつつある者（Der Genesende）」という章題が述べるように、ツァラトゥストラはここで決して「快癒」しきってはならず、「人間の卑小さ」の回帰という永遠回帰を克服してもいない。ここでツァラトゥストラは外の世界があたかも「花園

のように」己を待っているという「仮象」の力によって自らを回復させようとしているのは確かである。だが、この趣旨は決して仮象が持つ空想力・治療力そのものの称揚ではなく、むしろその力を使って、ツァラトゥストラが自らを再び「外部」へと橋をかけるべく、まだ見ぬ他者へと自らを関与せざるべく、自らを奮い立たせると読むべきと考える。

この卑小な人間の回帰による苦悩が「他者」との関係性に起因する限りにおいて、この苦悩を乗り越えるためにツァラトゥストラが必須とするのは、あくまでもより深い苦悩を持った「他者」である。正確には、そのような他者との出会いと別離である。彼らへの深い「共感」を経て、敢えて彼らと自らを別つことなのである。

二・五 「継承者」への意志と同情の克服という試練

ツァラトゥストラの世界観にとつて、「海」は人間の苦悩の「深み」を、「山」はその深みからこそ登ることが出来る精神的な「高み」を意味する。神の死によって荒ぶれる大海原という「混沌」から引き上げられる「絶望する者たち」である「高等な人間たち」は、この作中ツァラトゥストラに最も近い他者であり、ツァラトゥストラが永遠回帰を唯一口にする「友人」にして「弟子」である（第四

部「醉歌」。ツアラトウストラはより洗練された「詭計」によって彼らを自らの洞窟に呼び寄せ、そして試練に晒す。既存の理性の光が届かない自身の「洞窟」に呼び込むことで、果たして彼らの「混沌」が彼ら固有の、そしてかつ人類にとつての新たな価値を形成しえるかどうか、試練にかけるのである。ここでは仮面は、彼らとの近くかつ遠い微妙な距離を調整する役割を担っている。

序説における「綱渡り師」との関係同様に、「夜」においてツアラトウストラは他者と自己との間に引くべき境界線が弱まり、他者との共感・一体感が強まる傾向があるが、「真夜中」と呼ばれる第四部の佳境においてもそれは繰り返される（「ロバ祭り」で洞窟において彼らの「無」への欲望を具象化させたツアラトウストラは、しかしまだ彼らから距離を取ることが出来ない）。この「真夜中」において、「最も醜い人間」が語る永遠回帰を模した生の肯定を受け（第四部「醉歌」1）、彼はほとんど仮面なしに彼らと一体化する誘惑に駆られる。しかしその酔いどれた状態の真夜中において謳われる「醉歌」は、「高等な人間たち」への、そしてツアラトウストラ自身にとつても、作中「最後の試練」となっている。

この醉歌において、ツアラトウストラは深い分裂・葛藤の中にある。一方では（死せる）漆黒の真夜中に沈み込む

深い「快樂」へと誘われており、他方、来るべき「子供たち」への憧れという昼の仕事である。

一切の悩むものは、生きることを欲するのだ、熟し快樂と憧憬に充ちんがために、／いつそう遠いもの、いつそう高いもの、いつそう明るく澄んだものに対する憧憬に充ちんがために。「わたしは継承者たちを欲する」と、一切の悩むものは語る、「わたしは子供たちを欲する、わたしはわたしを欲しない」。

だが、快樂は継承者たちを欲しない、子供たちを欲しない、——快樂は自分自身を欲する、回帰を欲する、一切のものが、それ自らと永遠に同じであることを欲する、（第四部「醉歌」9）。

ツアラトウストラが引き裂かれている、真夜中の快樂と未来への憧れというこの葛藤は、似て非なる二つの「永遠性」という形で解釈できる。一つの永遠性は、「一切のものが、それ自らと永遠に同じである」ような、一切の創造力が活動を止めるような（もはや創造という言葉が意味を無くすような）死せる夜の永遠性である。もう一つの永遠性は、「最も遠くにあり最も未来にある」継承者としての子供たちへの憧れとして表現される、差異を孕んだ永続性で

ある。差異を孕んだというのは、ツアラトウストラの死後に現れるべき、来るべき世代への意志を意味しているからだ。

ツアラトウストラは死せる永遠性への「快」を、「子供たち」へのより大きな憧れである、意欲された永続性へと変転させる。ツアラトウストラが自らを賭すのは、夜における永遠の眠りという「深み」へと沈みゆくことではなく、来るべきものがその先達を絶えず、乗り越えようとする、そういう人類の未来を意欲する永遠性なのである。故に、この真夜中におけるツアラトウストラが欲する「永遠」は、(高等な人間たちと共に)山頂に留まることではなく、覚醒への意志であり、それは然るべき「道連れ」を探す、来るべき朝への意志なのだ。

ツアラトウストラは、高等な人間たちが彼の歌を理解しないであろうということは、既に予感している。「今やそなたたちは私の歌を学んだであろうか? この歌の言わんとするところを察知したであろうか?」(第四部「醉歌」9)故に彼は、詭計の教師として、彼の「友」に最後の試験をするかの如く、「もう一度」と言う名の輪唱歌を歌うのである。果たして彼らがこの輪唱歌によって永遠の夜(眠り)へと誘われるのか、それとも彼らの来るべき昼の仕事へと、「もう一度」と叫んで覚醒するのか、高等な人

間たちに対する最後の詭計(試験)としてである。

そもそも高等な人間たちは、各々の困窮から山を登ってきた訳だが、最後まで自らの生を肯定するということが以上の課題を有していない彼らは、「醉歌」に潜む、来るべき昼の仕事への覚醒という隠された含意を聞き取ることが出来ない。新たな日の出と共に「誇り高い羞恥」(第四部「しるし」)からツアラトウストラが高等な人間たちから終に距離を取ることを決心したとき、獅子が彼らを追い払うのだが、それはツアラトウストラが彼らに対する「同情」を乗り越える瞬間でもある。「私の苦悩と私の同情——それに何のことがあろう! 一体私の志していることは幸福を得ることだろうか? 私の志していることは、私の事業を成就することだ!」(同)。彼らとの別離によってこそ、ツアラトウストラは己の同情と苦悩を卑小なものとして眼下に見下ろすことが出来るのである。「真夜中」においてほとんど仮面無く関わった高等な人間たちに対する同情を乗り越える「大いなる正午」は、より深くより洗練された仮面とともに真の友(道連れ)を探す、彼の最後の「没落」の開始を意味する。

この、高等な人間たちとの別離とまだ見ぬ他者への出会いを意欲する瞬間こそが、ツアラトウストラが「卑小な人間の永遠回帰」という大いなる回帰に対してそれでもなお

「然り」という態度で対峙する時である。たとえ人間の卑小さが永遠に回帰したとしても、己を乗り越えることが出来るような「子供たち（継承者）」への意志、即ち強者が、回帰する円環への欲情によって、ツアラトウストラは人類の卑小な永遠回帰に対してそれでもなお身を投じるのである。

結

「仮面」はツアラトウストラにとつて、最も近い友人（共感しえた友人）から自らを別ち、なおかつそれを超えて新たな未来の友人と出会うための条件である。この他者との出会いと別れを巡るツアラトウストラの歩みは、人間の未来への大いなる憧れを携えながらも現在に、かつ現実、に生きなければならぬ自らの「宿命」に対して、「然り」という人間の英雄的行為を示している。外部の他者を超人へと誘惑するということと、超人へと自らの孤独をより内的に深めてゆくという営為は、ツアラトウストラにおいて、共時的に進行する。

人間を互いに別つと同時に不可分に結びつける仮面という精神の形式は、人間があくまでも社会的動物として、この人間世界の中で生きざるを得ない揺るぎない証左であ

る。如何にしても、我々はここから離れ去ることは出来ない。素顔を隠すこの表面的な外装は、従来の慣習の枠内で俳優の如く振舞う者にはなく、むしろたとえ彼と他者との間の、あるいは彼と同時代の精神との溝が深く大きくとも、束縛された精神をその最高度の独立性へと向け変えようと試みるものにとつてこそ必要なものとなる。

その意味では、彼が他者に対して最も深く秘め隠す「素顔なるもの」は、自らの精神的な独立性に対する強い意志であるとともに、彼が友（敵）と認めうるような、そのような真の他者への熱望でもあるのだ。

《注》

(1) 『ツアラトウストラかく語りき』の訳は吉沢伝三郎訳（ちくま学芸文庫）を適宜参照した。